

KONAN UNIVERSITY

『源氏物語』東屋巻「楚王の台の上の夜の琴の声」 ： 白雪曲・廻雪曲との関連について

著者	河村 奈穂子
雑誌名	甲南大學紀要.文学編
巻	143
ページ	73-87
発行年	2006-03-15
URL	http://doi.org/10.14990/00000837

『源氏物語』東屋卷「楚王の台の上の夜の琴の声」

——白雪曲・廻雪曲との関連について——

河 村 奈穂子

はじめに

東屋巻で、浮舟と語らう中、薫はひとり琴を奏でる。そして琴を押しやって詩句を口ずさむ。

琴は押しやりて、「楚王の台の上の夜の琴の声」と誦じたまへるも、かの弓をのみ引くあたりにならひて、いとめでたく、思ふやうなりと、侍従も聞きたりけり。さるは、扇の色も心おきつべき閨のいにしへをば知らねば、ひとへにめできこゆるぞ、後れたるなめるかし。ことこそあれ、あやしくも言ひつるかな、とおぼす。^①

〔七・三四五〕

しかし何とはなく口ずさんだ「楚王の台の上の夜の琴の声」(以下「楚王」の詩句と略す)の詩句は、班婕妤の故事を示

す「班女が閨の中の秋の扇の色」^②(以下「班女」の詩句と略す)が上の句としてあるものであった。その故事とは、班婕妤が漢の成帝の寵愛を失ったことを、夏に珍重された白絹の扇が秋になると捨てられてしまうことに例え嘆いたというものである。くしくもその時浮舟が手にしているのは、その故事を踏まえたかのような白の扇であり、そのことに気づいた薫は、「ことこそあれ、あやしくも言ひつるかな」と、言うにも事欠いて、おかしい詩句を口にしたと思う。これではまるで浮舟を班婕妤のようにみなしてしまうかのようなだからである。

この場面に影響を与えているのは、薫が口ずさんだ「楚王」の詩句ではなく、その上の句「班女」の詩句である。それは、浮舟が手にしている「白い扇」と薫が口ずさむ詩句を素晴ら

しいと聞きいる女房の侍従、そして同様に浮舟のその様子に
対し、「さるは、扇の色も心おきつべき閨のいにしへをば知
らねば、ひとへにめできこゆるぞ、後れたるなめるかし。」
と、実は扇の色も氣にとめるべき閨の故事を知らず、ひたす
ら感心し、心得がないという草子地によって、場面に取り込
まれていることがわかる。このように従来薫が口ずさんだ
「楚王」の詩句は、その上の句である「班女」の詩句を導き
だし、そこに踏まえられた班婕妤の故事に気づかせるだけの
ものと解釈されてきた。⁽³⁾

しかし、「班女」の詩句はあくまで薫によって実際に口に
出されたものではなく、直接場面には現れていない。また、
薫が班婕妤の故事に気づくのは口ずさんだ後である。琴を奏
で、浮舟と語らう中で口ずさまれた詩句は、本来はその時の
薫の感情や状況を表現したその場にふさわしい内容であつた
とまず考えるべきではないか。⁽⁴⁾

本稿は、「楚王」の詩句の典拠を探ること、この詩句も
また班婕妤の故事を踏まえた「班女」の詩句同様、場面に反
映されていることを考察していきたい。

一 「楚王」の詩句の典拠

さて、薫が口ずさんだ「楚王」の詩句は『和漢朗詠集』卷
上、冬、雪に載っており、よく知られている詩句である。ま
ずは『和漢朗詠集』における解釈を手掛りに、この詩句の典
拠を探っていきたい。

『和漢朗詠集私注』には、以下のようにある。⁽⁵⁾

題_レ雪。尊敬。班婕妤詩曰、新裂_二齊紈素_一、鮮潔如_二霜雪_一。
裁為_二合歡扇_一、團々似_二明月_一。文選注曰、琴有_二廻雪曲_一。

まず、『文選』卷二十七、樂府上、班婕妤の「怨歌行」が
示されている。「班女」の詩句に班婕妤の故事が踏まえられ
ていることは、改めていうまでもない。問題は「楚王」の詩
句に対する注である。

『和漢朗詠集私注』には「文選注曰、琴有_二廻雪曲_一。」とあ
る。「廻雪」の語については、『文選』卷十九、賦癸、情、曹
子建の「洛神賦」に、「髣髴兮若_二輕雲之蔽_レ月_一、飄飄兮若_二流
風之廻_レ雪_一。」とだけみられた。そこには琴との関わりはなく、
曲名ではなかった。管見の範囲では「廻雪曲」という語では
『文選』の中にみえなかった。しかし、何らかの関連がある
と考えられる。よってこの曹子建の「洛神賦」については後

述する。

このように『和漢朗詠集私注』とそれ以外の他の注釈を確
認すると、ほぼ同様の見解が示されていたが、その中に他と
異なる注を載せるものに、『朗詠抄〈書陵部本〉』があった。
『朗詠抄〈書陵部本〉』には「廻雪曲」ではなく、「白雪曲」
とある。

班女トハ、班婕妤^{ヘンシヨウウヨ}カ事也。扇ヲ作ル女也。其カ閨中ノ、
扇ノ色コソ、此雪ニ似レト云。扇ハ、白者也。下句、楚
庄王、蘭台ト云シ処ニテ、琴ヲ拖玉^{ヒキ}イシ音コソ、此雪ニ
形トレルト云ヘリ。琴ニ、白雪ノ曲アレハ也。尊敬作^{ヒキ}。

下の句に対する注には、楚の王が蘭台という所で琴を弾き、
その音色が雪の形容に例えられ、それは琴に白雪の曲がある
からであるという。

「廻雪曲」とは異なり、「白雪曲」の語を『文選』で探す
と何例もあり、卷十八、音楽下、嵇叔夜の「琴賦」に「理^⑨
正声^⑩奏妙曲、揚白雪^⑪発清角。」とあり、「白雪曲」とい
う琴曲の存在を確認できる。また『初学記』卷第十六、楽部
下、琴第一にも「琴歴曰、琴曲有^⑫（中略）白雪。」とあり、
「白雪曲」という琴曲があることは確かである。

「楚王」の詩句は、『和漢朗詠集』の「雪」の項目にあり、

『源氏物語』東屋卷「楚王の台の上の夜の琴の声」

また「題雪」という詩題から、雪について詠まれたもので
ある。それは『朗詠抄〈書陵部本〉』に「琴ヲ拖玉^{ヒキ}イシ音コ
ソ、此雪ニ形トレルト云ヘリ。」とあるように、琴の音が雪
の形容に例えられるからである。しかし、気になるのは「廻
雪曲」と「白雪曲」の二つの見解があることである。いずれ
も雪の形容に例えられた曲であることが想像されるが、違い
があるのであろうか。次に雪という語に注目し、「廻雪曲」
と「白雪曲」の典拠を探てみたい。

『初学記』卷第二、天部下、雪第二をみると、「廻雪」は
「洛渚宓妃」の項目にあり、「白雪」は「幽蘭」、「郢歌」の中
にみつけることができた。^⑬

洛渚宓妃 曹子建洛神賦云、余朝^⑭京師、言歸^⑮東藩。
覩^⑯一麗人、於巖之畔。乃援^⑰御者而告^⑱之曰、彼何人斯、
若^⑲此之豔也。御者対曰、臣聞河洛之神、名曰^⑳宓妃。余
告^㉑之曰、髣髴兮若^㉒輕雲之蔽^㉓月、飄飄兮若^㉔流風之迴^㉕
雪。^㉖（傍線筆者。以下同じ。）

幽蘭 宋玉諷曰、臣嘗行、僕飢馬疲。正遇^㉗主人翁出。
母又到^㉘市。主人女、欲^㉙置^㉚臣堂上^㉛太高。堂下大卑。乃
更為^㉜蘭房奧室、止^㉝臣其中。有^㉞鳴琴焉。臣援而鼓^㉟之、
作^㊱幽蘭白雪之曲。^㊲

郢歌 宋玉対問曰、客有歌於郢中。其為陽春白雪、國中属而和者、不過數十人。是其曲弥高而和弥寡。

「廻雪」については、「洛渚宓妃」の項目に、先述した『文選』にある曹子建の「洛神賦」から引用があり、風に吹き廻る雪のような洛水の女神の姿を形容した語とある。そして「白雪曲」については二つの故事がみつげられた。

「幽蘭」には、宋玉の「諷賦」に、宋玉が以前旅行した時に、従者は飢え、馬も疲れたことがあった。その時宿った部屋に琴があり、そこで幽蘭と白雪の曲を弾いた、とある。

一方「郢歌」には、宋玉の「対楚王問」に、楚の都の中に歌う者がおり、陽春、白雪の曲を歌うが、国の中でそれに続けて唱和するものは数十人に過ぎなかった。これはその曲が高尚な曲であればあるほど続けて唱和する者が少ないからである、とある。

このように雪についてみた場合も、「廻雪」は曹子建の「洛神賦」が示され、洛水の女神の姿を形容したものでしかない。しかし「白雪曲」は、「幽蘭」では宋玉が奏でた琴曲とあり、「郢歌」では歌曲とある。

さてここで、これらの故事が「楚王」の詩句に関わるのであれば、「楚王の台」とあるように楚王との関係と、「琴の声」

とあるように音楽についての関連が無くてはならない。その点でいけば、『初学記』『雪』の項目にみえる「白雪曲」に関する「幽蘭」と「郢歌」の引く故事は、「幽蘭」は琴曲であり、「郢歌」は歌曲をいうものである。また、どちらも楚王との関わりの深い宋玉の作品でもある。これらの点から、「楚王」の詩句の典拠としては、「廻雪曲」よりも「白雪曲」をいうものの方がふさわしいといえる⁽¹⁸⁾。そして「白雪曲」には雪に関わる二つの故事があるのである。

二 琴曲「白雪曲」について

「楚王」の詩句にいう「琴の声」の示すものが、「白雪曲」であるならば、東屋巻において薫が奏でた曲は「白雪曲」であると想像できる。

『孟津抄』に「楚王善琴、弾白雪曲⁽¹⁹⁾俄晴天陰雪降故云余也。」と「白雪曲」の名がみえる。これも一つの手掛りとなる。このようなことから、東屋巻と関連させながら、「白雪曲」について詳しくみていきたい。

まず、当時の文学における「白雪曲」の利用を確認したい。それについては、中野方子氏の論に詳しい。

中野氏は、紀貫之の琴について詠まれた和歌が、「白雪曲」

を踏まえてのものであることを指摘している。

『貫之集』第四、四四五番歌に、

月に琴ひきたるをききて、女

ひくことのねのうちつけに月影を秋の雪かとおどろかれ

つつ

がある。⁽¹⁵⁾この和歌には、「月影」を「雪」に見立てる漢詩文の影響があり、特に「秋の雪」という語は、白樂天の「秋雪」の詩語を利用しており、そこに琴曲「白雪曲」との関連をみる。それは琴曲「白雪曲」は『樂府詩集』卷五十七、琴曲歌辞一がいう「琴集曰、白雪師曠所作、商調曲也。」⁽¹⁶⁾と「商調」の曲であり、五行思想によって「商」は「秋の音」を表すからである。また『新撰朗詠集』下、雜、管絃〔四二九〕に「画扇月落、秋調白雪之声」⁽¹⁷⁾とあり、「白雪曲」が「秋の音」であることがわかる。それゆえ、貫之の和歌に琴曲「白雪曲」が踏まえられていると中野氏は指摘するのである。⁽¹⁸⁾

中野氏の論で注目されるのは、貫之の和歌における「白雪曲」に関わる漢詩文を踏まえた取用の方法である。「月」は「雪」に見立てられ、実際には降っていない「雪」を「琴の音」が表現する。その「琴の音」というのは、「白雪曲」であり、「白雪曲」が「秋の音」であるので、「秋の雪」と詠じ

るのである。

このように貫之の和歌は、「白雪曲」に関わる故事の当時の和歌への利用を示すものである。また、漢詩文である『新撰朗詠集』管絃〔四二九〕の「画扇月落」の表現に、班婕妤の扇に似通う点が見えることも興味深い。⁽¹⁹⁾これらは当時の「白雪曲」の受容のあり方を連想させる事例と受け取れる。そして、こういった状況下で「白雪曲」が連想されるのかという手掛りにもなる。また、「楚王」の詩句は対句の「班女」の詩句に「秋の扇の色」とあるように「秋」と記される点で、『和漢朗詠集』では冬の雪の項目に入れられているものの、雪は雪でも「冬の雪」ではなく、実は「秋の雪」なのではないかと考えられる。こういった点で、「楚王」の詩句は、貫之の和歌に近い表現といえる。

これらのことを踏まえ東屋巻をみていくと、貫之の和歌との類似点が見出せる。

①ここにありける琴、箏の琴召し出でて、かかることはた、ましてえせじかしと、くちをしければ、ひとり調べて、宮亡せたまひてのち、ここにてかかるものに、いと久しう手触れざりつかしと、めづらしくわれながらおぼえて、いとなつかしくまさぐりつつながめたま

ふに、月さし出でぬ。

〔七・三四四〕（傍線筆者。以下同じ。）

②尼君の方よりくだもの参れり。箱の蓋に、紅葉、蔦など折り敷きて、ゆゑなからず取りまぜて、敷きたる紙に、ふつつかに書きたるもの、隈なき月にふと見ゆれば、目とどめたまふほどに、くだもの急ぎにぞ見えける。

やどり木は色かはりぬる秋なれどむかしおぼえて澄める月かな⁽²⁰⁾

〔七・三四五〕

①は薫が「楚王」の詩句を口ずさむ少し前の場面である。

薫が八の宮を思い出しながら、宮の琴をひとり調べる中で、「月さし出でぬ」とあり、そこには「琴」と「月」がみえる。そして②は薫が「楚王」の詩句を口ずさんだ後、弁の尼と和歌を贈答する場面である。「隈なき月」の中で、くだものをもった箱に敷かれた紙をふとみれば、弁の尼の和歌があり、「秋」と「澄める月」が詠まれる。この季節は「秋」で、また「月」がある。

この東屋巻の場面には、貫之の和歌にもある「琴」と「琴の音」という事物と「月」と「秋」という景物が揃っている。そしてこういった情景の中で、雪を詩題とする「楚王」の詩

句が口ずさまれ、「雪」の要素も加わる。また、浮舟の持つ「白い扇」も、班婕妤の故事を踏まえれば「雪」と「月」を連想させる。⁽²¹⁾このようなことから、状況に合う選曲を想定すれば、薫が「白雪曲」を琴で奏でたと考えられる。

三 歌曲「白雪曲」の東屋巻への利用

またもう一つ、薫が琴で「白雪曲」を奏でた証がある。それは歌曲「白雪曲」をいう『初学記』「雪」、「郢歌」に引く宋玉の「対楚王問」と東屋巻の場面の類似である。先ほど少し触れたが、改めて『文選』巻四十五、対問、宋玉の「対楚王問」を詳しくみておきたい。

楚襄王、問於宋玉曰、先生其有遺行、與、何士民衆庶不譽之甚也。宋玉対曰、唯。然有之。願大王、寬其罪、使_レ得_レ畢_二其辞_一。客有_レ歌_二於郢中_一者。其始曰「下里巴人」。國中属而和者数千人、其為「陽阿薤露」、國中属而和者数百人、其為「陽春白雪」、國中属而和者数十人、引_レ商刻_レ羽、雜以_レ流徵、國中属而和者、不過_二数人_一而已。是其曲弥高、其和弥寡。（中略）夫聖人瑰意琦行、超然独処。世俗之民、又安知_二臣之所_レ為_レ哉。

ここで、宋玉は楚王の問いに答えるために歌曲を例えに出

している。その歌曲に対する五臣の李周翰の注には、「翰曰、下里巴人下曲名也。陽春白雪高曲名也。」とあり、下里、巴人は下曲の名、陽春、白雪は高曲の名とある。またこれについては『文選』卷十七、論文、陸士衡の「文賦」にも、「綴下里於白雪。」とあり、それに対する李善と張銑の注に、「善曰、(中略)譬以下里鄙曲綴於白雪之高唱。(中略)銑曰、(中略)下里鄙辞也。白雪高曲也。」とある。これらの注から、下里、巴人とは下曲、鄙曲であり、田舎で歌われる曲の意味で、宋玉の文にもあるように、数千人もの多くの人が知っている曲である。一方、陽春、白雪は高曲、高唱であり、楚の都で歌っても続いて唱和するのは数十人とあるように、なかなか一般の人には理解できない曲であることがわかる。このように宋玉は、人々が宋玉を誉めないのはなぜかという楚王の問いに対し、下里、巴人の下曲は理解する人が多く、陽春、白雪の高曲は理解する人が少ないという人々の曲の理解度を例えにして、それと同じように優れた才能を持つ自分を凡庸な一般の人々は理解できないためであると説明している。

この宋玉の「対楚王問」の内容をみると、宋玉の楚王の問いに対して答える議論の仕方に、東屋巻との類似がみられる。それは東屋巻の以下の場面である。

まいて、かやうのことともつきなからず教へなさばや、とおぼして、「これはすこしほのめかいたまひたりや。あはれわがつまといふ琴は、さりとて手ならしたまひけむ」など問ひたまふ。「その大和言葉だに、つきなくならひにければ、ましてこれは」と言ふ。いとかたはに心後れたりとは見えず。

〔七・三四五〕

この薫の「あはれわがつまといふ琴」という言葉には、「わがつま(わが妻)」と同じ意味の「あがつま(吾妻)」が掛けられており、そこには「吾妻」を由来とする「東」が示されている。このことから、薫の発言の「東の国で育ったあなたですから、東琴は弾けますよね」という箇所には浮舟が東の国に育ったことと、東琴が弾けますかという二つの意味が込められていることがわかる。一方それに対する浮舟の返答は、薫の言葉に自分が東で育ったことと東琴の二つの意味が込められていることに気づき、加えて東琴が大和琴とも呼ばれることから、そこに大和の言葉である和歌を掛けて、「大和の言葉である和歌もわからないのに、まして大和琴は弾けません」と返答している。このように、この場面は掛け言葉を用い複雑に構成された会話の応酬になっている。⁽²⁾

この薫と浮舟の言葉を整理すると、薫と浮舟が対極的な関

係にあることがみえる。薫の「あはれわがつまといふ琴」の発言は、浮舟が東の国に育ったことと東琴は弾けるかという二つの意味を含む。それに対し、浮舟は大和の言葉もわからないし、大和琴も弾けないと答える。そこには大和の国と東の国、そして琴が弾けることと弾けないことの二つの対比がある。それは大和の都の音楽を理解する薫と、東の田舎の国の音楽は理解するかもしれない浮舟という関係を示している。⁽²³⁾このように薫と浮舟の関係は、宋玉の「対楚王問」にいう陽春、白雪のような、高尚な曲を理解する宋玉と下里、巴人の田舎の曲しか理解しない一般の人々という関係と重なるものがある。

また、もう一つ薫と浮舟の対極する関係を挙げるならば、詩歌についてである。浮舟は東琴が大和琴とも呼ばれることから、大和の言葉である和歌とを掛けて、和歌の話題にすりかえ、それゆえ琴も弾けませんと琴と和歌の二つの意味を込める機転を利かせた返答をしている。しかしその後、続く記述では、浮舟は薫が口ずさんだ「楚王」の詩句の対句「班女」の詩句の扇に関わる班婕妤の故事に気づかない。このことは、やはり浮舟が詩歌の道に不案内であることを示すものである。ここからは詩歌を解する薫と詩歌を解さない浮舟という対極

をみることができる。ここにも「対楚王問」にいう、高尚な歌曲を理解する宋玉と、田舎の歌曲しか理解しない人々という関係と、薫と浮舟との関係が重なり合っている。

さて、この薫と浮舟の琴についての対比と、詩歌についての対比からは、薫の教養とかけ離れた田舎人の浮舟の姿がうかがえる。このような浮舟との距離を感じたことで、薫は自身を宋玉になぞらえたのかもしれない。そのことによって連想されたのが宋玉の「対楚王問」の故事であり、そして口ずさまれたのがそれを踏まえた「楚王」の詩句であったのである。

また東屋巻の薫と浮舟の会話が、歌曲「白雪曲」をいう宋玉の「対楚王問」の故事を踏まえつつ琴と和歌の二つを話題としているならば、それは薫が「楚王」の詩句を口ずさむ理由になる。「白雪曲」には琴曲と歌曲をいう二つの故事があるが、どちらか一方の故事だけでは「楚王」の詩句は理解できない。両方の故事を踏まえてこそ詩句を理解できるからである。このことがわかってからこそ、薫と浮舟の会話は琴と和歌の二つを話題にしているのではないか。このようなことから、薫は「白雪曲」を奏でたと考えられる。

四 「廻雪曲」について

「廻雪」は『文選』曹子建の「洛神賦」にみえる語で、洛水の女神の姿を表現した語である。これは『初学記』「雪」の「洛渚宓妃」に引かれており、雪を連想させる語でもある。そこには、音楽との関わりがないため、「楚王」の詩句の典故とは考えにくいと述べた。しかし、『和漢朗詠集』の諸注釈には「廻雪曲」をいうものがみえる。このことから何らかの関連があると思われる。次に「廻雪曲」についてみていきたい。

果たして「廻雪曲」は存在するのか。それについては『和漢朗詠集私注』の指摘する『文選』にはみえなかったが、初唐の李嶠の「雪」詩に対する張庭芳の注にみる²⁴ことができた。李嶠の「雪」詩には、「①逐舞花光散、②臨歌扇影飄。」とあり、①の注に「舞有七盤、廻雪曲。言、雪下似舞。」（傍線筆者）とあり、②の注は「歌有白雪曲。又、有歌扇曲。班婕妤詩曰、新裂齊紈素、皎潔如霜雪。裁為合歡扇。」とある。

この詩句は雪について詠まれたものであり、②の句においては、歌は白雪曲、扇は班婕妤の詩を踏まえることが注にみ

『源氏物語』東屋卷「楚王の台の上の夜の琴の声」

える。ここには「楚王」の詩句と句の構成において似通うものがある。このような先行する詩に類似点が見えることは、句作りの段階で参考にされた可能性が高いことを意味し、李嶠の詩と「楚王」の詩句に何らかの関連が見出せるものと思われる。またその詩句の対句①の注に「廻雪曲」の語が見えるのは偶然ではないであろう。雪について詠まれた詩であることから、そこに関連性を見出した。

このような詩句の注に、「廻雪曲」は舞曲とある。李嶠は雪の降る様子を舞と歌とで表現している。それは「言、雪下似舞。」とあるように雪が降るのに似た舞であるという注からもわかる。『和漢朗詠集』の諸注釈に、なぜ「廻雪曲」と「白雪曲」の二つの見解がみられるのか疑問であった。しかし、李嶠の「雪」詩をみるに、雪の降る様子を表現するという目的が同じであることから混同された可能性が考えられる。そのため『和漢朗詠集』の諸注釈に二つの見解がみえたのであろう。

また、これについては「白雪曲」と「廻雪」の関わりをいった中野氏の見解も参考になる。中野氏は、「白雪曲」の故事を示す「対楚王問」に登場する楚王と宋玉が、同じく宋玉の「高唐賦」にも登場することにより、二つの作品が結びつ

けられるようになったのではないかと述べる。巫山の仙女を「高唐賦」では「暮雨」「朝雲」と表現しているが、宋玉の「高唐賦」の影響を受けた曹子建の「洛神賦」には「廻雪」とあり、仙女（洛水の女神）を「雨」ではなく「雪」に見立てている。そこに「白雪曲」の影響があるという。それは『千載佳句』下、宴喜部、歌妓（七四〇）崔膺の「不随暮雨蒼江去、且向朝雲白雪歌」の詩句に、巫山の仙女を表す「暮雨」「朝雲」という語と共に「白雪」という語が用いられているからであると述べられている。⁽²⁷⁾ 中野氏の指摘からいえることは、「廻雪」の語は、宋玉と楚王に関わると、「白雪曲」の語に含まれる内容の影響を受け、時に混同されやすいということである。

さて、「廻雪曲」は舞に関係する曲である。それは『初学記』巻第十五、楽部上、舞第五に、「張衡「舞賦」、（中略）裾似飛燕、袖如廻雪」⁽²⁸⁾とあるように、袖を翻し舞う姿を表現している。また、菅原道真の『菅家文草』巻第二（一四八）「早春内宴、侍仁寿殿、同賦春娃無氣力、応製一首。」に、「舞身廻雪霽猶飛」⁽²⁹⁾と内宴での舞姫の舞い姿は「舞身」と表現され、それを「廻雪」のようであるとしている。また白楽天の新樂府、「胡旋女」にも、「絃鼓一声双袖举、廻雪飄

飄轉蓬舞」⁽³⁰⁾と舞を舞う姿を「廻雪」と表現している。そして「飄飄」の語であるが、これは「廻雪」の語と共に「飄飄兮若流風之迴雪。」と曹子建の「洛神賦」にもみえる語である。白楽天の詩には、舞姫の舞い姿を表現しながら、その舞姫の姿に洛水の女神の姿を重ねて詠んでいる。

五 「廻雪曲」の東屋卷への利用

「楚王」の詩句が踏まえる故事は、「白雪曲」に関わるものである。しかし「楚王」の詩句の故事を探す手掛りとした『和漢朗詠集』の諸注釈には、「白雪曲」だけでなく「廻雪曲」をいうものがあつた。それは二つの曲に混同される要素が存在するからである。この混同を踏まえ「廻雪曲」の持つ意味を東屋卷に読みとってみたい。

さて、東屋卷では、「楚王」の詩句から連想される「班女」の詩句は、班婕妤が帝の寵愛を失うという意味で利用されているが、『初学記』「雪」に「班扇」の語がみえ、班婕妤の故事は、また雪を連想させるものでもある。

東屋卷に浮舟の姿を述べた箇所がある。

白き扇をまさぐりつつ添ひ臥したるかたはらめ、いと隈なう白うて、なまめいたる額髪の際など、いとよく思ひ

出でられてあはれなり。

〔七・三四四〕

この場面で浮舟の姿は「いと隈なう白うて」とあるように「白い」と表現される。またこの浮舟の「白い」という特徴は、浮舟が「白い扇」を持つことから、班婕妤の姿を連想させる。そこから、従来は浮舟に班婕妤のような寵愛を失う女君という面があると指摘されてきたのである。しかし、班婕妤の扇は、『初学記』『雪』の「班扇」という語によって雪を連想させる語でもある。「班扇」はその扇の白さによって雪を連想させる故事として成立している。よって「白い」という姿を記される浮舟は、班婕妤のように寵愛を失う女君という意味を持つだけでなく、班婕妤の扇のように「白い雪」を連想させる女君ともいえる。

「廻雪」は『文選』曹子建の「洛神賦」にみえる語で、洛水の女神の姿を表現した語であり、『初学記』『雪』に「洛渚宓妃」とあり、雪を連想させる語でもある。そして「廻雪曲」は舞曲であり、白楽天の「胡旋女」にみられるように、舞姫の舞い姿に洛水の女神の姿を重ねることがある。

また「班扇」と「洛渚宓妃」のつながりとしては、雪の意味を含んだ語を集めた空海の『文鏡秘府論』地巻、九意、七雪意に、「班婕扇至、洛媛裙開。」と、班婕妤と洛水の女神と

の対がみえる。これらから一貫していえることは、全て「雪」につながる連想から成り立っていることである。このようなことから浮舟は「班女」の詩句によって班婕妤に見立てられるだけでなく、「楚王」の詩句に「廻雪曲」の利用があると考えた場合は、雪が降り廻る様子に似た洛水の女神のように美しい舞い姿が重ねられるともみることができるのである。

おわりに

従来東屋巻では、薫が「楚王」の詩句を口ずさんだ後、上の句「班女」の詩句に班婕妤の故事があることに気づくことにより、浮舟に対して寵愛を失う女君という側面だけが注目されてきた。しかし『和漢朗詠集』にも載せられているこの対句の典拠を探ること、その一面だけが場面に利用されたのではないことが明らかになった。以下、本稿での論述をまとめておこう。

「楚王」の詩句は『和漢朗詠集』『雪』項目に載ることからもわかるが「班女」の詩句も合わせて共に「雪」を連想させる故事で構成される。そこに音楽との関連を加味した時、まず「白雪曲」が典拠として浮かぶ。そして「白雪曲」には琴曲と歌曲を示す二つの故事がある。その琴曲「白雪曲」の

利用をみた場合、その故事を踏まえたと指摘のある貫之の和歌にみえる事物と景物は東屋巻の中にも存在する。また歌曲「白雪曲」をいう『文選』宋玉の「対楚王問」の内容と、東屋巻で交わされる薫と浮舟の会話の話題とその応酬のされ方に類似点がみえる。また『和漢朗詠集』の諸注釈に典拠として指摘のある「廻雪曲」は、琴との関連がないことから直接の典拠としては認められない。しかし、楚王と宋玉との関連がうかがえる時、曹子建の「洛神賦」の洛水の女神の姿を表現する「廻雪」の語と「白雪曲」の語との混同から、雪の降る様子に似た洛水の女神のような舞い姿が連想され、そこに「白い」と表現される浮舟の姿を重ねることができる。

東屋巻には「楚王」の詩句の典拠とされる「白雪曲」と「廻雪曲」を連想させる要素が数多くある。「白雪曲」から薫は、「対楚王問」にあるような宋玉に似た自身の立場を、田舎人であり、琴、詩歌を解さない浮舟との関係から感じ取り、そして「廻雪曲」からは洛水の女神のような舞い姿を、「白い」と表現される浮舟の姿に重ねてみているのである。また薫が「楚王」の詩句を口ずさんだのは、詩句の典拠となる「白雪曲」を琴で奏でていたからである。このように、班婕妤の故事が示す、寵愛を失う女君という内容に薫が気づく

前には、彼が口ずさんだ「楚王」の詩句は、状況に即したその場にふさわしい詩句であったのである。

ここは決して班婕妤の故事の一面だけをいう場面ではない。「白雪曲」と「廻雪曲」が示す複数の故事を踏まえて描かれた、「楚王」の詩句もまた反映している場面なのである。

※原文引用に際しては、漢字は現行の字体に改め、句読点、返り点は原則として底本に従ったが、私に改めた所もある。また作品番号が付されたものはそれも示した。

【注】

(1) 以下『源氏物語』の引用は、新潮日本古典集成により、その巻数、頁数を記す。

(2) 『源氏積』（冷泉家時雨亭文庫蔵「源氏物語注釈」）に「こときんいはをしやり給てそわうかたいのうへのよるのきんのごゑとうちすんし給へるもかのゆみをのみひくあたりにならひていとめてたう思やうなりとしうもきゝるたりけりさるはあふきの色も心おきつへきねやのいにしへをはしらねはといふ所はんちゅうかねやのうちのあきのあふきのいろ そわうたいのうゑのよるのきんのごゑ班女はんじょ閨けい中秋扇色 楚王台上夜琴声」とある。「班女が閨の中の秋の扇の色 楚王の台の上の夜の琴の声」の引用は、『和漢朗詠集』新潮日本古典集成によった。

(3) 沢田正子氏「宇治世界の楽の音―源氏物語の楽の音（続）―」

『静岡英知女学院短期大学紀要』一五、昭五八・二二、中川正美氏「IX 源氏物語の主題と音楽」(『源氏物語と音楽』和泉書院、平三・一二)、上原作和氏「V〈琴〉のゆくへ」(3)「楽統継承譚の方法あるいは宇治十帖の精神史的基層」(『光源氏物語の思想史的変貌——〈琴〉のゆくへ』有精堂出版、平六・一二)、藤河家利昭氏「『源氏物語』の楽の音と自然——月を例として」(『源氏物語の源泉受容の方法』勉誠社、平七・二。初出は『広島女学院大学公開講座論集 自然と日本文学』広島女学院大学刊、平四・七)、青柳隆志氏「源氏物語における朗詠と催馬楽」(『源氏物語研究集成 第九卷 源氏物語の和歌と漢詩文』風間書房、平一二・九)等がある。

(4) 青柳氏、注(3)の前掲論文の、朗詠された詩句がいずれも演奏中の楽器に関わりがあり、そして朗詠する行為は、自ら弾く楽器によって喚起されるとの見解はみるべきものがある。二二五頁。

(5) 伊藤正義・黒田彰両氏編著『和漢朗詠集古注釈集成』大学堂書店、平六・一。

(6) 長澤規矩也氏編『和刻本 文選』汲古書院、昭四九・一二。以下『文選』からの引用はこれによる。

(7) 「文選」云、琴有廻雪曲「文」。(『和漢朗詠集註略抄』)、「琴ニ廻雪ノ曲アリ」。(『和漢朗詠集注〈国会本〉』)、「其琴ノ曲、即チ、廻雪ノ曲アル也。故ニ、廻雪ノ曲ヲ引クニコソ、似レト

云也。」(『和漢朗詠集仮名注〈広島大学本〉』)、「言ハ、ユキノ、メクリヒルカヘルアリサマ、楚王ノ琴曲ニ似タリト云也。」(『和漢朗詠集永濟注』)と「廻雪曲」を注する。

(8) 注(5)の前掲書。

(9) 陸士衡「文賦」に「綴下里於白雪」、馬季長「長笛賦」に「中取度於白雪淥水」、謝惠連「雪賦」に「又統而為白雪之歌」、鮑明遠「翫月城西門廨中」に「蜀琴抽白雪、郢曲發陽春。」がみえる。

(10) 「唐」徐堅等著『初學記』中華書局出版。以下『初學記』からの引用はこれによる。

(11) 『藝文類聚』卷二、天部下、雪に、「洛神賦曰、飄飄兮若流風之迴雪」、「宋玉曰、陽春白雪、國中屬和者、不過二十人。」とあり、「洛渚宓妃」、「郢歌」と同じくみえるが、「幽蘭」についてはみえない。各出典は、「洛渚宓妃」は『文選』卷十九、賦癸、情、曹子建「洛神賦」、「幽蘭」は『古文苑』卷二、宋玉賦六首「諷賦」、「郢歌」は『文選』卷四十五、對問、宋玉「對楚王問」である。また「班女」の詩句が示す故事も「班扇」の語でみえる。みな「雪」を連想させる語である。

(12) 「迴」は「廻」に通じる。また、「飄飄」は「飄飄」との異同あり。

(13) 柿村重松氏著『和漢朗詠集考證』藝林舎、昭四八・一二に、宋玉の「對楚王問」を注する。柿村氏も「白雪曲」を典拠

と考えたと思われる。

- (14) 野村精一氏編『孟津抄』下巻、源氏物語古注集成第六巻、桜楓社、昭五七・二。

- (15) 『新編国歌大観』第三巻、私家集編Ⅰ、角川書店、昭六〇・五。

- (16) 郭茂倩編『樂府詩集』国学基本叢書、台湾商務印書館。

- (17) 『新編国歌大観』第二巻、私撰集編、角川書店、昭五九・三。

- (18) 中野方子氏「白雪曲」と「琴心」―貫之の琴の歌と漢詩文―

『中古文学』第五二号、平五・一一―一三頁。また「秋雪」については、渡辺秀夫氏「第一篇『古今和歌集』と漢詩文第四章 紀貫之の和歌と漢詩文」(『平安朝文学と漢文世界』勉誠社、平三・一)に詳しい。一二五頁、一四〇頁。

- (19) 柿村重松氏著『倭漢新撰朗詠集要解』目黒書店、昭六・三に班女の扇との指摘がある。また班婕妤の「怨歌行」は『初学記』巻第一、天部上、月第三「似紈扇」にも引かれ、まるい月を表現する語としてみえる。「画扇」に班婕妤の扇が連想されるのは、こういった点によるのであろう。そして班婕妤の故事と白雪曲が共に詠み込まれることに、「楚王」の詩句との共通点が見出せる。

- (20) 「長月は明日こそ節分と聞きしか」と言ひなぐさむ。今日は十三日なりけり。」(七・三三八)とあり、九月一三日の夜の月である。

- (21) 班婕妤の扇は「雪」を連想させる語である(注11参照)。また、「月」を連想させる語でもある(注19参照)。

- (22) 『源氏物語』七 新潮日本古典集成、三四五頁、頭注一二、一三、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』国文学「解釈と鑑賞」別冊、No.6 東屋、二二七頁、鑑賞欄、語句解釈。

- (23) 沢田氏、注(3)の前掲論文に、浮舟はひなの楽の奏でられる世界にしか身の置き所がないとの指摘がある。二九―三二頁。

- (24) 『李嶠百二十詠』の伝来については、藤原佐世撰『日本国見在書目録』に著録がみえる。また伝嵯峨天皇筆『李嶠詩』二十一首がある。李嶠詩の受容については、柳瀬喜代志氏「李嶠雜詠」受容史管見」(『日中古典文学論考』汲古書院、平一・三。初出は『東方』第一二六號、東方書店、平三・九)に詳しい。

- (25) 引用は〔唐〕張庭芳注『百二十詠詩注』慶応義塾大学図書館蔵による。文字の異同に『百二十詠詩』天理大学図書館蔵の張庭芳注には「廻雪」を「回雪」とする。また『全唐詩』には「散」は「動」とある。

- (26) 金子彦二郎氏著『平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句研究篇』培風館、昭一八・一二。

- (27) 中野氏、注(18)の前掲論文、一七頁。

- (28) 『藝文類聚』巻四十三、樂部三、舞にも「後漢張衡舞賦曰、

(中略) 袖如_三迴雪。」とみえる。

(29) 川口久雄氏校注『菅家文草 菅家後集』日本古典文学大系七二、岩波書店、昭四一・一〇。

(30) 高木正一氏注『白居易』上、中国詩人選集第二二卷、岩波書店、昭三三・二。

(31) 弘法大師空海全集編輯委員会編『弘法大師空海全集』第五卷、筑摩書房、昭六一・九。